
夢を見たのは、青い楽園で

君祈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢を見たのは、青い楽園で

【Nコード】

N7674Q

【作者名】

君祈

【あらすじ】

銀の乙女と騎士の王国ランサルニアには、民に愛される第四王女がいた。彼女は七の騎士と共に戦場をも駆け抜け民を救い、幻のよう美しい青の楽園を支配する。伝説の乙女の再来とも呼ばれる彼女が騎士と共に歩む、穏やかだったりぐだぐだだったり大切に傷ついたり傷つけたり癒し癒されたりして、最後には答えに納得し笑ってみたりする物語。

（騎士には、傍付正統派苦勞性、能天気いじられ、眼鏡怪力策士、主至上乙女、若作り好々爺、腹黒好少年、元暗殺者隣国皇太子と幅

広く取り揃えております。笑

ブローグ 〜あなたが私に問うたこと〜（前書き）

R15タグを保険でつけさせていただきました。

そういった描写があるかは、今のところ未定です。
ご了承くださいませ。

プロローグ くあなたが私に問うたこと

？ラティン、君は君であることの意味を知っているかい？
いつかあなたが私に問うたその言葉を、微睡みまどろみの中私は今日も
繰り返してる。

＊ ＊ ＊

大陸共通の神話であり信仰宗教の礎でもある『創四記そうしき』において語られる、国と人の始まり。
それは古き世、他の地とは切り離され海に浮かぶ楢円だえんの大陸に、ナチュラホステ 大女神 が降り立つところから描かれる。
大女神はまず、広大な大陸を等しく分けるように十字に指でなぞると、それを形なき境界と定め、四つの種を蒔まいた。

一つは銀の弓に、一つは岩の斧おのに、一つは空の珠たまに、一つは海
の泡に。

種は見る間に芽を出し花を咲かせ実を結ばせると、大女神の歌に
応えてそこから四人の神人かみびとが生まれた。

彼らは大女神の前に跪ひざまずき、誕生した最初の息で運命を問う。

『我らが使命はいかに』と。

大女神は大陸を指差しそれぞれ四つの大地を治めよと告げ、彼らに
不思議の力が宿った神器を授けた。

銀の弓より生まれし乙女には、神の理と医術の智慧が記された皮の本を。
岩の斧より生まれし智者^{ちしや}には、創造の技術と鉉脈がもたらされる金の鍵を。
空の珠より生まれし淑女には、全ての植物と獣が育つ金剛の杯を。
海の泡から生まれし猛者^{もさ}には、水と和^わする心と海幸^{うみさち}を与える銀の綱を。

大女神の命を受けた神人は大陸に散りその神器を以^もって力と成し、
様々な困難を乗り越え国を生み、人の祖となった。それこそが、

騎士の王国・ランサルニア、
職工^{しよく}の皇国^{おうこく}・タトアント、
農功^{すいし}の領王国^{かいたうこく}・ユリアントレッタ、
水土^{すいし}の海統国^{かいたうこく}・スファイアのはじまりである。

ブログ くあなたが私に問うたこと（後書き）

何もかもがはじめて尽くしで、恐々としております。

ですが、皆さまにほんの少しでも楽しんでいただけたら、どれほど幸せだろう。

と夢見ております。 どうか、よろしく願います。

君祈

1 . 姫と騎士の日常

銀の乙女が守護せしめる王国、栄光の地ランサルニア。

『創四記』に続く神話に登場する、荘厳かつ秀麗な数多の神々が眠る地。

猛き精霊の咆哮が侵すことを禁忌とする、銀の乙女眠れる地。四つに分けられた大陸の、右下に位置する智慧の国。

一年を通して穏やかな常春の気候は、神々をも眠らせ、人々はのんびりと日々を過ごす。

豊かな水と、肥えた大地、穏やかな風、咲き誇る花々。

騎士神の剣と銀の乙女の本を国旗とする、医学と神学に長けた、その歴史は数千年にも及ぶ古き地の王国。

時は、そのランサルニアが最も美しいと謳われる季節 麗春の一日。六十日という期間で区切られる季節は、二ヶ月を一単位とする。その 麗春 が抱くのは、四月と五月。冬の終わりからゆるゆると暖かくなる二月三月の 淡春 と、夏にむけてじわじわと暑くなる六月七月の 烈春 の間に位置している、気候自慢のランサルニア切つての季節だ。

春霞の青い青い空の下、どこまでも続く緩やかな浅緑の丘には、色とりどりの花々が見渡す限り一面に広がっている。遠く、零れるように湧く清い泉を越えて、丘の草花を優しく撫でる風。花の香のするそれが髪を揺らして去ってゆくのは、何よりも心地いい。

日に透ける、少し波打った腰まで伸びる長い黒曜石の髪が、優しい手に梳かれているよう。

(幸せ……)

少女が微睡むのは、目の醒めるような青から今にも消えそうな薄青まで、国中の青い花を集めてつくられた 青の楽園 と呼ばれる王城内の広大な花園。その花々の種は現五十二代国王ルエン・ガオール・ランサルニアが誕生と共に娘に贈ったものだ。それは彼の末子であり、第四王女である彼女、ミナラセ・ラティフィーン・ランサルアーナの、授かりし預言称号がミナラセ 青き であつたことに由来している。

その花園に在る数え切れない種類の花々は、ラティフィーン自らも手塩にかけ育てている彼女の宝物だ。その美しさはまさにこの世の楽園であり、民のために公開される一定の期間には、国内からだけではなく、他国の者まで遠路遙々（えんろ）はるばる）一目見ようと訪れる程の絶景。

そして、いつの間にか王女が育てたこの庭の花々は敬愛を込めて、せいせい 聖青花 と呼ばれるようになり、さらにそれはラティフィーン自身の二つ名となつていた。

その目を見張る程美しい花園に、数多あまたある種の中で最も多く植えられている幻の花がある。たった数瞬目を留めてしまえば二度と忘れることの出来ない潤むような深い青をした、柔らかな花卉が幾重にも重なつた大輪の花。

？エディエン？ それ自体が 楽園 の名を持つ、ラティフィーンの象徴花。

その中に埋もれるようにして風のそよぐ青空の下微睡むのが、この王女の最大のお気に入りの時間だつた。

「我が君、起きてください。日に焼けると侍女達に怒られます」
かけられた深い色の声に、少女は年の割に小柄な体をさらに小さくして、ふわふわとした絹のような感触のエディエンの花の寢床へ

一層深く沈む。もう少しで、完全に見えなくなるほどに。

ぐずるラティフィーンに声をかける青年は反応がないことを見ると、持っていた資料に没頭するうちに移動していた太陽を追ってわずかに身を動かし、自らの体で彼女にかかる日を遮った。

「我が君、どうかもう起きてください。皆が戻ります」

「んう……だつて、もうし………ばらく昼寝なんてできないんだも……」

ようやくラティフィーンが口にした言葉に、再び青年は黙った。

精巧極まりない顔にわずかに困ったような表情を浮かべ、彼は彼女を見つめた。そして、ほとんど眠りの中にあつて舌の回っていないか
つた言葉を反芻する。はんすう

？しばらく昼寝が出来ない？。確かに、そうなることは間違いないかった。それどころか、日々の睡眠時間が危機的状況になることさえすでに絶対的に確定している。

つまり、彼がいつまでも彼女を起こせない理由は、そこだった。

これから六十日ほど彼女が最も好むこの趣味が取り上げられると思つと、あと少し、あと少しと眠らせてやりたくなり、時間の迫つた今に至つてもどうしても強くは言えなかった。

そしてこの三時間で唯一の言葉を発した少女は、そのまま再び青の花々へもぞもぞと潜り込む。

華やかでいて澄んだ甘い香りが、夢をゆるゆると手繰り寄せてゆく。やっぱりこのまま寝てしまおう、そう思いラティフィーンが体の力を抜いた瞬間。

「起きろ」

少女の腰に何かが巻きつき、彼女を青い花に囲まれた？巣？から引つ張り上げた。そのまま？連行者？はラティフィーンを半分肩に

担ぎ上げると、無造作に歩き出す。

ラティフィーンを想い、三時間そばに立ち続けた青年であったならば絶対にしない行為だったが、王女はただ目を一つ擦っただけだった。そしてようやく瞼を持ち上げると、ラティフィーンとは違った、光を吸い込むような漆黒の髪が彼女の顔の横で揺れていた。

「ユイ……戻るの早かったねえ」

「もう三人集まっている。早く来い」

彼の歩調はラティフィーンが普段歩く倍の速度にも関わらず、伝わる振動は移動しているのか疑うほどのもの。そしてその無表情な横顔もいつも通りだ。ラティフィーンは頬をつけていた肩から頭を離し、ぼおーっとしながら顔を上げる。そこには、先程まで少女を起こすに起こせなかった青年がすぐ近くまで迫っていた。

「己^{おの}が主に失礼だろう。下ろせ」

常よりも幾分低い声で、国の守護神である騎士神の像よりも整った顔を不快そうに歪め、エディエン色の外套を纏った彼は警告する。しかし、目元へ届く黒髪が風にさらさらとなびいていることにも気づいていないような無表情さで、王女を攫った男は前を見つめたまま言い放った。

「俺はこいつを、主と思ったことはない」

ぐっと、後ろを歩く青年の眉間にしわが出現するのを、幸い未だうつらうつらとしていたラティフィーンは気づかない。その顕現^{けんげん}が彼女が最も恐れ戦^{おの}くものの一つであるのは、それが後に続く短くも受けきれないほど重い問いや言葉や沈黙の連撃を、彷彿^{ほうふつ}とさせるからだ。

そして突然、まだ覚醒しきらないラティフィーンのうつすらと開いた瞳に流れていた景色が止まった。どうしてだろうとぼんやり考えている彼女の、まるで荷物のように扱われている少し丸まった背中に、夏空のように晴れやかな声がかかったのは、その時だった。

「おい、お姫。もうすぐ十八の式だったのに、その移動方法はないだろ」

「また昼寝ですか。まったくもっていい気なものです。こちらは汚い小屋に留まって、一手打ってきたというのに」

後に続いたのは、知性ある落ち着いた声。けれどその嫌味ったらしい物言いを、ラティフィーンはいつもの小言と聞き流す。しかしその青年の後ろに立っていた女性は、ラティフィーンを発見しすぐさま駆け寄る途中、それにしつかりと反論した。

「我らは姫のために振われる剣。我らが働くのは当然だろう。……姫、御髪に葉が付いております。お取りしますので……ユイ殿、姫を降ろしてもらいたい」

頷くことさえせず、睨まれながら言われた彼はラティフィーンを肩から下ろした。すかさずその女性は髪を衣装をと甲斐甲斐しく、寝惚けるラティフィーンの身なりを整えはじめる。

「ほっほっほ。急ぎ帰って来たというに姫様に構って貰えないからと言うて拗ねていては、やはり「坊」の名からは逃れられませんか」はじめの二人を普段から省略名に？坊？を付け呼んでいる派手な若者衣装のその人は、愉快そうに老人の鑑かがみのような笑い声を上げながらのんびりと歩いて現れた。

言及された二人はそれには何も言わず、ただ苦い顔をする。

ふいに、ラティフィーンらが立つ真横の生垣が風もないのに不自然にがさがたと揺れた。庭に引かれている通路とはまったく異なつたその場所から突然、天を走る雷のように黄色い影が飛び出した。

「姫さま、僕戻りましたっ！」

あまりの勢いにラティフィーン達の目の前を横切つて、かなり離れた場所に着地し、慌てて駆け戻りながら元気よく声を出す。いつものように独自の近道から出てきた、まだ少年とも呼べる顔立ちの彼は、無邪気な笑みを浮かべて褒められるのを待つ子供ようにラティフィーンの前で止まった。そのでたらめな登場も、ラティフィー

ン達には常の事だったが、普段なら掛かる叱責や呆れの声は今回ばかりはない。

「一番遠くまで行ってくれたのに、早かったね」

「はいっ、僕頑張ったんですよ！」

少し上がった息で、さらににこつと笑う。二番目に移動距離のあった翁の倍の遠さまで出かけていたはずだったが、ほとんど同時に戻って来ている。それでも、仕事をきちんとかなしたことは確かだった。

「早くしないと、式に遅れると思ったんです」

「うん。ありがと、ティス。お疲れ様」

眠気の少し残った顔で、ラティフィーンが優しく笑う。それに嬉しそうに少年は頷くと、ぼんと後ろに跳び退って、すでに一箇所に集まっていた仲間の元へ加わった。

ラティフィーンは腕を青天へと高く突き出してうんと伸びをすると、頬に手をやり、景気良く張って顔を引き締めた。

「さて、みんな作戦の準備も終わらせてくれたみたいだし」

すつと背を伸ばしたその黒^め瑪瑙の瞳は、もうすぐ十八になる娘には凛々しい、まさに王女のものだった。

「では、これより式をはじめます」

2 . 騎士の誓い

聖青花　の花々が咲く　青の楽園　の主、ラティフィーンがこのランサルンア王国にその名を広く、そして深く広めるのは、その花園のためだけではなかった。　聖青花　が表すもう一つの意味は、ラティフィーンの六人の直属の騎士達。　聖青花の騎士団　を示していた。

ランサルンア最高の騎士と謳われる彼らを従え、大小問わず数々の功績を成し、民だけではなく国を救う姫としてその名を馳せる彼女は、今まさに式を執り行おうとしていた。

そしてその三時間前、この場所から騎士達を送り出す時、ラティフィーンはこんな話をしていた。

『三ヶ月くらい前、私がまだタトアントにいた頃、大陸で一二を争う職人さんに頼んで打って貰った武具が、今日届いたの』

それまで、ある行動に取り掛かるための作戦会議でしていた、王女としての毅然とした態度を崩して、ラティフィーンは笑った。

『新しい騎士も増えたことだし、ちょうどいいかなと思ったんだ。』

ついでに、銀器ぎんきも新しくしてちょっと凝った物にしてみました。まるで自らが贈り物を貰うように目を輝かせて、彼女は話す。

『私も、もう十八なんだな』と思ったら、何かしたくなっただ。みんなに』

今この時があることを心から嬉しく思うからこそ、この「ありがとう」を、真っ直ぐに伝えたくて。

『私からみんなへの感謝の気持ちだと、思ってくれたら幸いです！』その思いをしつかりと受け取ったことを、それぞれの騎士がそれ

その態度で示すと、ラティフィーンはこれ以上ないほどの満面の笑みで応えた。

それから、少し赤みがさしている自覚のある頬を、ここまでの苦難を越えて一緒にいられる誇りで引き締める。これから、作戦の場に送り出すのだから。

『じゃあみんな、気をつけていつてらっしゃい。帰ってきたら、私たちだけで式をしようね』

その言葉に、普通ならば半日はかかるだろう作戦実行のための事前準備と対策を約三時間で終わらせて騎士達は我先にと帰って来た。新しく用意された二つを受ける、この式のために。

国で最も有名な 聖青花の騎士 となる際には、青き姫から主たる三つの物が与えられ、それらが騎士の証となる。

一つは、 聖青花 。千に届く種の青花の中から、ラティフィーンがその者に合ったものを選び与え、その花の紋を自らの？騎士紋？として刻むことができる。

もう一つは、 青銀器 。

銀製の装飾品に、授けられた花紋が彫られており、その溝には青玉が埋められた物。

そして最後の一つは、苦しみの果てに己が人生で得た訓を捧げることを誓い、得る 騎士名 。

それら三つは騎士達が、己が誇りの形として心から大切にしている物だ。だからこそ、それらを再び与えるこの式には深い意味が在り、彼らにとって重要なものだった。

新たに用意された 青銀器 と花紋の彫られた武具を渡し、騎士との深い絆を喜ぶ「再任の儀」と、新たに忠誠を誓い騎士となる「着任の儀」が行われるのは、 青の楽園 の中央。

一面の青が円状に切り取ったように開かれ、豊かな緑の芝生が敷

き詰められた空間の中心には、すべて真白の大理石で出来たさほど大きくはない建物がある。少し高めの床に、十二の柱を立てその上に一枚岩を乗せただけの、風通しはいいが雨風の強い日には使えない簡素な造りの物。

見渡す青の中で際立つそれは、あおその はつか青園の白花 と呼ばれている。

その中心には、同じく純白の大理石でできた大きな円台と八つの椅子が置かれていた。

しかし、常ならばそこにあるはずの椅子は片付けられ、円台は、ぎりぎりまで大理石の床の端に寄せられていた。その上には武具と様々な形の 青銀器 が綺麗に並んでいる。

それらの最終確認を終えたラティフィーンは、小さく顎を引き、真っ直ぐに背を伸ばしてわずかな風に黒髪を揺らし、一段高い 白花 の床の上に立った。

振り返った目線の先、少し離れた芝生の上には式が行われる順に 一列に並ぶ騎士達の姿。

「まずは再任の儀から行い、その順の規定は騎士団への正式な着任式が成された時を用います」

日常騎士達と接する時とは異なり、彼女のその口調と声には生まれながらに高貴な者の気迫がある。それはラティフィーンが、王女としての覚悟をもって式に臨んでいる表れだった。

彼女の右隣にある円台の一番右端にあった 青銀器 を手にし、ラティフィーンは騎士達の方へ体を向けた。

「わたくし私こと、現国王ルエン・ガオール・ランサルンア陛下が第四王女、ミナラセ・ラティフィーン・ランサルアーナの守護騎士であり、直属騎士団第一騎士兼長である、クレファド・ラン・ファルシア。私が与えし名は、我が騎士ルクレシア。前へ」

3 .

再任の儀

第一の騎士 ルクレシィア

その呼び声に迷いない歩を出し進み出たのは、一目で人を惹き付ける蜜蝋のような黄水晶の瞳の高貴なる騎士。空気に溶けて消えてしまいそうなほど細くされた象牙のような髪を肩まで伸ばし、一部を後ろに結び留めている。その纏う気たるや眩いほど気高く、堂々たる姿は強く美しき騎士神の化身のような？騎士の王？と呼ばれる、完全なる者。

直系王族が生まれし折に選ばれ、生涯一人の王族に忠誠を尽くし仕えることを誓う「守護騎士」である彼は、長身を高貴な騎士らしい銀の多くあしらわれ白を基調とした服装に包み、紺碧の長い外套を肩に巻き胸元で留めている。

その外套を風に攪^{ひね}わせ、五歩、六歩と前進しラティフィーンの前に来ると、彼は真っ直ぐに主を見つめ、それから静かに跪^{ひざまず}き深く頭を垂れた。

「我が君」

その声に、万感の思いが込められていることを感じ取って、ラティフィーンは小さく頷いた。

はじめて出会った日が、まるで遙か遠い昔のように思える。寂しいような誇らしいような、よく分からない気持ちにラティフィーンはなった。

「その名の意味は、ルクレ・シィア 永久^{とわ}なる魂。貴方が私に授^{さず}ける言葉は何ですか」

「我が持てる全ての物と時と思いを、貴女^{あなた}に捧げます」

かつて彼が守護騎士として、真の誓いを立てた日と同じ言葉にラティフィーンは胸を掴まれた思いだった。

ランサルンアでは、王の子が一歳になると一生の忠誠を誓う守護騎士が決められる。実質には王の子が三歳になる誕生日から、片時も離れず生涯傍に仕え続けるのが習わしとなっていた。そしてラティフィーンが一歳の誕生日を迎えた時、選ばれたのはランサルンア最大の貴族である二貴家の片割れ、ファルシア家の五つになる長男、次期当主であつたクレファド。

当時前代未聞のその出来事に、貴族達は騒然となつた。

普通、守護騎士は二貴家の三男以下、または二貴家に次ぐ五大家の次男以下から選ばれる。さらにラティフィーンは本来ならばそれらの位の者が就くことさえ稀な、王位継承権の最も低い末子の王女そのため、クレファド家を支持する貴族やその貴族に仕える役人から領民にいたるまでの反発は、並大抵のものではなかつた。

さらに幼い次期当主にはすでに、家の未来を間違ひなく輝かしいものとする、当主としての器量や才能が顕れていたことも、躍起になつて守護騎士になることを彼らが阻もうとする大きな一因となつていた。

そんな中で出会つた二人が、お互いを理解し信頼し合えるようになるのはほぼ不可能な事。

それでも、これは王の命であり、さらにはルエン 導きの名を持つ国一の夢見預言師である彼の真正正銘の「預言」であつた。守護騎士選定への預言は、ここ数代の王の治世にもなかつた稀なる神託。

それは誰にも、たとえ王であつても覆せない、世界の大きな流れ

の意志。

その後は、運命の意志に逆らう禁忌に触れることへの畏怖によって、徐々に事態は沈静化した。それに習うように当事者の二人は、表面上差し障りのない振る舞いの守護騎士と王女として、時を過ごすことになる。

しかしラティフィーンの母が亡くなってしばらく、彼女が七つになった頃に起こったある出来事が、二人を式でのみしか会わない疎遠な関係にしまった。

それは、もはや周りの目から隠せない程のものであり、歴然たる？不和？として噂されることになった。

元より無理な話だったのだと、口さがない者達はこぞって悪質な噂を述べラティフィーンの目の前で声を立てて嘲笑った。

それから八年の時が流れ、それさえ噂にも上らなくなった約二年前。

王宮内で偶然にも政治内情を他国へ売る内通者を発見したルクレシアを目にとめ、一人密かに協力を申し出たのが、ラティフィーンだった。

そんなことは出来ない^{かたくな}と断固として拒否したルクレシアを無視して、第四王女は付き纏い、頑^{かたくな}な守護騎士が折れざるを得ないほどの功績により彼を助けた。

そしてたった十五になったばかりの少女が、自らの言葉通り、民のためにたった一人危地へ飛び出し命を懸けるその姿を目にして、ルクレシアは驚愕した。

誰に知られずとも、命の危機に瀕しても、背に弱きをかばい気高く立つ小さな王女。

その眼差しに貫かれた、その瞬間に。

この姫が在るのならば民を救えると、仮初の守護騎士は稲妻により

て天啓を受けたが如く、ただ確信した。

眩暈まはゆがする程胸を震わす眩い希望と、一生の茨となるだろう後悔と共に。

生涯、彼女をただ一人の存在とし、傍に仕え続けることを全身全霊を捧げて誓った。

今彼は、誰よりも揺るがない力で彼女を支える、ラティフィーンにとってなくてはならない無二の存在。
騎士の中の騎士だった。

「ルクレシァ。貴方には騎士団の「大剣」の称号を与えます。そして、この 青き楽園 より、リニエディエンの 聖青花 を贈ります。その証として、名と 聖青花 の花紋を刻んだ 青銀器 を共に」

跪く彼のそばに寄り、ラティフィーンは上部の髪を結び留めていたかつての青銀器を取り外した。さらりと流れ落ちた髪をもう一度梳き上げて、そつと新しい証を着ける。ぱちりと、象牙色の髪に合うよう燦いぶされた銀の髪留めが音を鳴らして、在るべき場所を誇らしげに飾った。

「？貴方？が選んだ聖青花は、私の 聖青花 でありこの 青の楽園 の象徴花、？エディエン？を助け支える紺碧こんぺきの助勢花じょせいか」

少し離れ円台に向くと、ラティフィーンは次に大剣を手にしてもう一度前に出る。跪いたまま、ルクレシァが腕を上げてそれを厳かに受け取り、静かに告げた。

「私はこの剣の刀心とうしんに、 聖青花 を深く刻みます。見えずともこの剣を支える刀心の如く、見えずともこの心の深きにいつも貴女を

置き、その身を支えることを永久に我が君にお誓い申し上げる証にして」

静かに述べられる声には、途方もない覚悟が溢れていた。

彼が得た 永久の魂 を懸けて誓うこの言葉こそが、彼の真実。

宣誓を終え、ルクレシィアはゆっくりと立ち上がると、刃を下にして柄^{つか}を握り剣を胸元に掲げる。同じく覚悟をもって強く^{うなず}頷き、ラティフィーンもそれに応えた。

（これ以上ない程、私は貴方に助けられて来たよ）

騎士団を作り、民を守る事を夢見て走り出したあの日から。ずっと。

深く深い感謝と共に目を閉じ、心から祈った。

「貴方に、ランサルニアの騎士の神と銀の乙女の加護を」

ラティフィーンのかけた言葉に一礼をして、ルクレシィアが剣を地に立てる。

それを見届けると、ラティフィーンは視線を移し、少し遠くに立つ新たな騎士を呼んだ。

3 . 再任の儀 第一の騎士 ルクレシィア（後書き）

ここから、各騎士の紹介となります。

本日中（私が起きている間）に書き終えたいと思っておりますので、

どうかお付き合いくださいませ。

4 . 再任の儀 第二の騎士 クラーフェルド

「次に、騎士団第二騎士、ラウス・レッジ。私が与えし名は、我が騎士クラーフェルド。前へ」

ぐつと力強く足を踏み出しルクレシアに並んだのは、太陽よりも煌めく金の髪を揺らす夜明けに似た青紫の瞳の精悍な顔つきの騎士。長身ばかりのラティフィーンの騎士団の中でも、最も背が高く体躯の良^{たいく}い彼は、式だというのに上着も着ていなかった。

薄地の白いシャツを大きく肌蹴させ着崩しているにも関わらず、匂い立つ気品は損なわれていないのは、彼の生まれ持った資質によるもの。

雄々しく、整った唇をにつと引き上げて、クラーフェルドは跪いた。

「お姫」

普段からのその崩された呼び方に、この時ばかりは流石に変えるだろうと予測していたラティフィーンは、少し驚く。しかしすぐに、してやったりと輝く綺麗な瞳を見つけて小さく笑った。この彼の自由さと器量の大きさに、何度となく助けられてきたことを思いながら。

「その名の意味は、クラーフ・フェルド 金色^{こんじき}の太陽。貴方が私に授ける言葉は何ですか」

「誰かを罰するより憎むより、俺はでっかく包むことにした。全部俺の中に入れて、俺の内を見るんだ。受け入れるってのは、たぶん

そういうことだ」

最大の二貴家に続いての権威を誇る五大家の一、あまりの強欲で名高いレツジエ家の三男坊として彼は生まれた。

金、地位、名声、食、色、娯樂。

幼き頃、ありとあらゆるものを貪り^{むやみ}尽くさんとする家族が理解できず、彼は父を母を兄を姉を、憎み嫌悪した。そしてその葛藤の^{さいな}苛みに耐え切れず、九歳になる前、逃れるために神学寮へ飛び込んだ。

しかしそこで、着衣の着替えなどの当たり前のことですえ己には満足に出来ない事を知ることになった。

そしていかに自らの身に、あれ程自分は違うと叫んだレツジエ家の習いが、汚泥のように積もっていたかを見つける。

もう己は、あの腐臭のする欲のかたまりと同じように生きるしかないのかと、絶望した時。

西の隣国スファイア海統国の同年の少年と、クラーフェルドは出会った。孤児でありながら強く気高く生きる彼の姿に、自らも一人の力で生きられる術を得ることを強く望んだ。そのためには、全ての力を尽くすことを誓って。

そうして神学寮を出て、大陸中を自らが稼いだ金だけで旅を始めた。大工の家に居候をしその技を学び、嗜みとして学んだ神学を子供たちに教え、汗をかき傷一つなかった手をぼろぼろにして、彼はやっと自らだけの力を得た。

その後約十年、クラーフェルドは身一つで旅を続けた。しかしそれでも、時折自分の何気ない感情や行動に、あの家の「化け物」のような感覚が垣間見える時。爪で喉を掻き^{うご}き息を止めるほど己を疎み、「いつか自分もああなるのでは」というあまりの恐れに、震えが止まらなくなった。

そして旅が丁度十年を迎えようとしていた一昨年の七月、ランサルニアの王都から遠く離れた東の域を通りがかった時、人手不足の王女に出会い、そのまま迷う暇なく大捕り物に駆り出された。

第四王女を名乗る小さな少女は、彼を太陽みたいだと言った。それ自体は髪の色もあつて珍しくなかったが、彼女のその理由は、「夜明け色の瞳が、夜を見つめ包む太陽の色だから」。

太陽は、夜が在りその闇を知って全て受け入れて光るからこそその、太陽。

その言葉は、彼が己でさえそれとは気づかずに、十年の旅の中

か

渴望してきた答えだった。

怯むことなく真っ直ぐに闇さえ包み込む光を惜しみなく与える、黄金の日輪。

にちりん

そのとき彼は、二度と足を踏み入れないと誓った王都に、彼女の騎士となり戻ることを決め、？太陽？となることを願った。

「クラーフエルド。貴方には騎士団の「双剣」の称号を与えます。

そうけん

聖青花 は、ヒンテマリアを贈り、その証にその花紋を刻んだ青銀器 の腕輪を」

ラティフィーンはクラーフエルドの横へ膝を付き、既に先の青銀器のある左腕ではなく、右腕を取って新たな証を彼の手に通した。どうかこの銀の輪が、彼の？日輪？の助けとなるようにと祈りながら。

「私が選んだ 聖青花 は、真夏の火輪の化身とされ、大地を肥やし人々に愛される青紫色の太陽花」

たいようか

かりん

ラティフィーンは、立ち上がると対称となる二振りの剣の片割れを取り、クラーフエルドの前に突き立てる。もう片方に手をのばすために振り返った瞬間に、垣間見えたクラーフエルドは、重い剣を持つラティフィーンに盛大にはらはらしていた。

（確かにこれ重過ぎるけど）

手つきは、危うくないと思う。一応、練習だったのだ。先程までの不遜な態度はどこへと言いたくなるほど、心配しなければならぬような様なのだろうか。手にしたもう一振りの剣を地に刺しながら、だったら先ほど式を終えた心配性のルクレシアは性格上、顔に出さなかっただけなのだろうと思った。

「受けますか」

クラーフェルドへ真っ直ぐに向き直ったラティフィーンが発したのは、先程にはなかった問い。直系王族に仕えることが定められた守護騎士には、無用の問い。

その声に、ラティフィーンの手元を見つめては不安げだった顔が、満面の、太陽のような笑みを湛えた。

「もちろん」

次に式を受ける騎士から、苦々しげな息が漏れたが、本人はどこ吹く風だ。

それでこそ、いつでもラティフィーンの心を暖めてくれる、金の太陽。

「ありがと、クラルド」

いつものように略して呼ぶと、さらに笑みを深くして剣を両手に攫み立ち上がった。軽々と双剣を胸の前に掲げる。

「俺は、握りの先に紋を彫る。俺の構えで、一番近くなるからな」

声が、常よりも真剣みを帯びていることに気づいて、ラティフィーンは強く頷いた。

「貴方にランサルンアの騎士の神と銀の乙女を加護を」

ラティフィーンの声に応え、ぐっと双剣を胸に押し当ててから、強く地に突き立てる。両の手をその柄に乗せたまま、クラーフェルドは雄々しく立った。

ラティフィーンは次の騎士を呼ぶべく、視線を動かした。

5 . 再任の儀 第三の騎士 シュクラツイーレ

「次に、騎士団第三騎士ストリア・タッドレ。私が与えし名は、我が騎士シュクラツイーレ。前へ」

ずっと身の重さを感じさせない優雅な足取りで進み出たのは、絹のような真っ直ぐな焦げ茶の髪を腰まで垂らした、翡翠の瞳が知的な印象を与える長身の青年。幾分古めかしい、深い緑を基調とした無駄のない貴族服に身を包む姿は、実際の年齢よりも落ち着いて見える。左目のモノクル、ランサルニア語でいう片眼鏡かためがねをついと撫で上げ、彼はゆっくりと跪いた。

「姫君」

しつとりと深く声で、その音をなぞるように彼は口にする。その頬の横を、音もなく深い深い紅茶色の帳が流れていった。

「その名の意味は、シュクラ・ラツイーレ 真心の智慧ちえ。貴方が私に授ける言葉は何ですか」

「ただ只管ひたすらに、書を開き筆を執りと、他の一切を廃してこの身に知を蓄えてきました。しかし、それを真に用いるのは、思つ心があつてこそであることを示す、私は生きた証です」

生まれる前から彼が背負った業は、遙か百年前の栄華を忘れられない一族郎党からのお家再興という期待の枷。気が付けば、日がな一日机に向かい、ありとあらゆる学問を詰め込む日々。そして運命は、彼に比類なき天賦の才を与えていた。

一時の休む間もなくまるで文書を判で押したように暗記し、それらすべてを指先で水遊びでもしているかのような気楽さで自在に使いこなすことが可能だった。

人を動かすこと、未来を予見することさえ、何の苦痛もなかった。最も強く復興を願い、彼が家のストリア 救い となるよう名づけた母はその才に狂喜し咽び泣いた。

けれど、何もかもが、彼にとって良い道を作る道具となった。それ以上もそれ以下の評価もない、無機質な道具。感情が動かなくなり、けれど表情を操ることさえ容易だった。悪意も善意も、言葉も思いも、何もかも切り捨てられた。

……けれど。

けれどいつも指を小さく切ったような痛みが、胸に在った。容易に振り切ることのできるあまりにかすかなそれを、何故か彼は握り締め守っていた。

それこそが、彼の最後の一線。

それを失えば本当に、自分は人ではなくなるだろうという恐れだとは気づかぬまま。

そうして時が過ぎ、王女の騎士の地位を得てその力を利用しようと約一年と八ヶ月前にラティフィーンに近づいた彼は、未来は本当は読めないことを知った。

ルクレシアと共に捕まえた内偵者の黒幕退治のための、二ヶ月駆けずり廻った大騒動の後。

王女と金の馬鹿騎士に否応なく感化され、ぼそぼそと「騎士の地位利用」の自分の策を正直に話し、生まれて始めての懺悔ざんげをすると、王女はにんまりと笑いこいた。

？はじめから、君の騎士勧誘と性格矯正のために巻き込んだの。

君が思うより広い世界へようこそ、シユクラツイーレ？

満面の笑みの少女を中心に、まるで色とりどりの花が咲いたような鮮やかさをもってどこまでも視界が広がってゆく感覚の中、あの小さな痛みを捨てずに生きてこれたことに、全てのものに感謝した。心が、息を吹き返す喜びに、目を閉じて。

この王女と共になら心を殺すことはもうないのだらうと、騎士となり己を、この鮮やかな世界を守るために捧げたいと思った。

「シユクラツイーレ。貴方には騎士団の「策謀」さくぼうの称号を与えます。

聖青花 は、スリランを贈り、その証にその花紋を刻んだ 青銀器 の単眼鏡を」
たんがんきょう

その言葉にシユクラツイーレは自らモノクルを外し、掌に乗せて両手で頭上に掲げた。それを受け取りながら、ラティフィーンは考える。

確かに、跪き頭を下げた者のモノクルを首尾よく付け替えることが自分に出来るかは甚だ疑問だ。自分で脱着してくれないと厳かに式ができない、と言い忘れてたのでそれは有り難い助けとなったが。恭しく垂れた頭から流れた髪では、歪んだ口元が隠しきれていない。

（それもわざとだけどね……）

先程、堂々とクラーフエルドが礼を省いたときには呆れたように息をついていたのに、自らは慇懃無礼いんぎんぶれいとは何事だ。本当にこんな性悪にうちの策を任せていいんだらうかと今更ながらに迷ってしまっそうだ。

しかし、代わりに受け取った細身のモノクルを静かに着けたとき、普段は滅多に目にしないような嬉しそうな顔でいつものように一撫でしたのを見たら、そんな考えも消えてしまった。

常ならば、または策の途中であつたならこれも彼の演出であるの
だろうが、今回ばかりは違うことをラティフィーンはよく分かつて
いた。

「私が選んだ聖青花は、高く真つ直ぐに茎をのばしつつも、地下で
は早く遠く根を張り広がる青緑の策士花」

次いでラティフィーンが手に取ったのは、黒皮で出来た指の出る
手袋型の手甲^{てうこう}。その甲には鋼鉄の板が嵌^はめられている。それだけで、
驚くほどの重さがあった。

それを、手に乗せシユクラツイーレの前に広げる。

「受けますか」

さらりと音を立て後ろへ髪をこぼして、シユクラツイーレが顔を上
げた。

「御意のままに」

丁寧に受け取り、慣れた様で手を通すと、真剣な瞳でラティフィ
ーンを見つめた。

「私は、この手甲に紋を刻みましょう。手を握れなくなろうとも離
れずに、貴女の許^{もと}に在る誓いをここに立てて」

決意を秘めた声で述べると、彼はきれいに立ち上がった。

「感謝します。シユツ」

その呼び名に、はっとした顔をしたのもつかの間、手甲を着けた右
手を胸に当て、嫌味なほど優雅に腰を折った。

「我が女神に、この地上無類の祝福を」

その大げさな礼を見ながら、やられたままなら可愛いのと、ラ

ティフィーンは思いかけ、止めた。そしたら私の参謀にはなれないなあと、少し笑って静かに告げた。

「貴方にランサルシアの騎士の神と銀の乙女の加護を」

顔を上げたシュクラツイーレは、誇らしげにラティフィーンを見つめ微笑した。

それに微笑み返すと、ラティフィーンはゆっくりと目線を変えた。

6 . 再任の儀 第四の騎士 メゼリエラ

「次に、騎士団第四騎士ミヨナ・マリキス。私が与えし名は、我が騎士メゼリエラ。前へ」

颯爽と出された足は布に包まれてもなお細く、進み出たのは肩を少し過ぎて伸ばされた燦^{いぶ}つたような赤の髪が凜とした女性。紅玉^{くぐりたま}の瞳は、真っ直ぐな意思を宿し主への思いの強さを窺^{うかが}わせている。

女物とも男物ともつかない簡素で動きやすさを重視した緋色の衣装は、ただ素直に女性特有の線の柔らかさを覆っている。きりりと背を伸ばしたその姿は、気品に溢れどこまでも美しかった。

さつと、彼女が膝を折る。

「姫」

短く呼ぶ声には、清い潔さが表れていた。その彼女らしさに、ラティフィーンはにっこりと笑顔でもって応える。顔を上げていたメゼリエラは、それを見るなりぱつと顔を赤くし俯いた。

「その名の意味は、メゼリエ・ゼリエ・ゼリエラ 愛の源たる言葉。貴女が私に授ける言葉は何ですか」

「苦しみの檻^{おり}を作るのは、己^{おの}が心。己^{おのれ}を囚われの者とするのは、己が自身。それを知った時、他に代える事のできない豊かな広がりを与え得ることが出来ます」

彼女は、女だからと家族さえ蔑^{みづ}む家に生まれた。家の男は父も兄も弟も、どんなことも力で自らの思い通りにしては、不快になると

当り散らた。母は、いつも俯き怒鳴られ詰られてもただ黙っていた。メゼリエラや双子の妹達へその矛先が向いても、母はやはり黙って泣いているだけだった。

その理不尽さに、その不毛さに、メゼリエラは身を焦がすほどの怒りを抱く。

何故何も言わないのだ。何故戦おうとはせず、逃げようともしないのだ。

心の底から、そんな人生など私は嫌だと思った。だから、二人の妹のためにも、どんなにつらく苦しいことがあるうとも戦い貫くことを誓った。

本棚の事典よりも重いものを持ったことがなかった幼い手を、庭を走ることさえなかった小さな足を、傷や胼胝やかさぶたでぼろぼろにして、女の手足からかけ離れた様になっても、メゼリエラは一日たりとも鍛錬を止めなかった。

なんと打ち負かされても立ち上がり、胼胝が破れ血で滑る杖を握り締めては、誓いを新たに刻んだ。弟に勝ち、兄に勝ち、父に勝ち、すべての男に勝利するのだと。それまでは泣くものかと、泣くものかと生きていた。

涙は、負けた者が流すのだと思っていた。

そうして数年が過ぎ、父が領主として治める土地だけではなく、北の地の広大な域の腕に覚えのある者を集めた大会で、優勝を収めた年のある秋の日。

自らの屋敷の近くを歩いていたはずが道に迷った先の森で、足を挫き動けなくなっていたところを偶然通りかかった少女に助けられた。その恩義を返さんと、断るラティフィーンを無視して追い掛け回し、一年半前の十一月、悪領主からの民の救出のための二ヶ月にも及ぶ大乱闘に、制止の声を聞かずに参戦した。

その中で、長き時奴隷として囚われながらも、恩ある者を手にかけた罪に苦しんだ者たちがその二つの枷から放たれるのを目にしたとき、もつずつと忘れていた涙が止め処なく溢れた。^{あふ}

妹達を守ると誓ってから、一度も流さなかったそれに驚愕したメゼリエラは、目が潰れれば止まるとでもいうように音がするほど強く拭った。けれどそれは、メゼリエラのものよりもずっと小さく柔らかい手によって止められた。そのまま、しっかりと自らの荒れ果てた手を握り締めて、少女は言った。

『泣いていいんだよ。泣いて泣いて、女の子は強くなるんだから』

強くなるために泣くのだと、小さな王女は、彼女と同じように泣いていた。

はじめて聞く、今まで考えたこともなかった言葉。

けれど。

泣きながら笑って、私の騎士になって欲しいと手をのばす王女を前に、頬を止め処なく流れるのは、胸に溢れて溢れて仕方ない喜びだ。

声を上げて泣きながら、小さな手を取って、一生彼女のそばにいられることをメゼリエラは願った。

「メゼリエラ。貴女には騎士団の「気品」の称号を与えます。聖青花は、ミテリスリナを贈り、その証にその花紋を刻んだ 青銀器の髪飾りを」

ラティフィーンがメゼリエラに歩き寄り、ミテリスリナの花を模った銀の花が鎖の先で揺れるそれを、前のものの隣に挿した。近づ

いた耳元でラティフィーンが嬉しそうに褒める。

「とっても可愛い。すごく似合ってるよ」

「姫、そういうことをおっしゃらないでください。……これ以上赤くなるのは嫌です」

その返答にくすくすと笑ったのは、ラティフィーンだけではなかった。己の式を待つ第六騎士の「メゼさんって、姫さま相手には豹変しますよね」といつもより小声のものの、後でメゼリエラに説教を食らうこと間違いない発言に、皆が苦笑した。

「私が選んだ 聖青花 は、小さな花が数多咲き誇り、青き霞のよう
うな美しく強い娘の象徴、深き青の乙女花^{おとめばな}」

続いてラティフィーンは鋼鉄製の、細いがずっしりと重い二メートルほどの杖^{うぎ}をメゼリエラの前に置いた。

「受けますか」

その心を表すような真っ直ぐな瞳で、メゼリエラが見上げる。

「この命、捧げる覚悟と共に」

受けた杖をきつく握り、跪いたままメゼリエラは続けた。

「私は、紋を杖の中央に深く刻みます。戦の最中^{さなか}とて、姫の騎士としての心を芯とすることをお誓い申し上げます」

そしてきりりと顔を上げ、 青銀器 の鎖を揺らして立ち上がる。
「うん。よろしくね、メゼ」

その言葉に、彼女はまたも淡く頬を染めた。その様を見ながら、王女は心底不思議に思う。

（こんなに可愛いのに、本人無自覚なんだもんなあ）

「貴女にランサルニアの騎士の神と銀の乙女^{のりこ}の加護を」

祝福の祝詞^{のりこ}の後にメゼリエラが杖を逆手に持ち地へ着け凜と立つと共に目を合わせて、二人で笑った。

それからラティフィーンは、次に並ぶ翁へと顔を向ける。

7・

再任の儀

第五の騎士 イヴォールフ

「次に、騎士団第五騎士デルト・レドロス。私が与えし名は、我が騎士イヴォールフ。前へ」

呼び声に応えて厳かかつ猛々しく足を踏み出したのは、灰色の緩く巻いた肩までの髪と、褐色の瞳の老騎士。その頭には流行の茶色の帽子を深めに被り、さらにその身の衣装も若者の流行を取り入れた赤茶の派手な異国のもの。

普段は好々爺然とした穏やかな翁だが、その真実はかつて激竜と渾名された古き猛者。^{あだな}

ゆつくりと、帽子を横に置き跪く。

「姫様」

いつもよりも幾分低いその声は、彼の忠誠の深さが目に見えるほど真摯さを湛えていた。

「その名の意味は、イヴォール・オールフ 赦しの山。貴方が私に授ける言葉は何ですか」

「生きる事、それすなわち赦す事と、我は見出した^{ゆる}り」

その言葉を受け、ラティフィーンはしっかりと頷いた。すると厳しかった相好^{そこう}を崩して、彼は言う。

「……五十年も、かかってしもつたですがの」

彼の父は、ランサルニアの北の地方の一角を治める領主貴族だった。

他の領主は踏ん返り返り税を搾り取ることしか考えないのに反して、父は領地の民の主な収入である名産品を作る職人集団を支え援助し、民の暮らしが安定し豊かになることに心を砕いた立派な人だった。

しかしその父は、助けていたはずの職人集団に殺されることになった。

それは、父に付いて行つては遊んでいた隣地方の大領主貴族の子、ドルドアが下した命。

賄賂、恐喝、暴力にも恩ある領主を売ることはできないと耐えた職人達は、妻や子らを人質に取られ、他の全ての選択肢を失った。

けれど、たつた十三歳だった少年には、彼らの事情を聞いたところで、父を裏切り殺害した者を到底許すことはなかった。

幼き新領主は職人集団を領地から追放し、母や妹を館に残し王都へ出ると騎士となった。

いつかドルドアの首を刎ね父の墓石に捧げ^はることを誓つて。

それから数年後、先代王の時代に、身を正さない悪領主狩りが行われた。現在では？貴族戦争？と言われる、そのはじまりに。イヴオールフは一も二もなく横領の証拠を探り当て処罰の許可を得ると、ドルドアの地方を滅ぼしに向かった。

が、すでに城の主は従者を犠牲に逃げ延び、行方を晦ませていた。わずかな手がかり見つけては追つて追つて追い続けたが、殺すことは出来なかった。

そして、何もかもに疲れ果て、王都に戻ると騎士であることを辞めた。

それから約五十年の時が過ぎ、北の田舎の小さな庵で一人暮らし
ていた翁の元に王女が現れ、こう告げた。

「かつてあなたが残した禍根^{かこん}が現れた」と。

目の色を変え戦うことを望んだイヴォールフが、二ヶ月の戦乱の
後に辿り着いた決戦の地は、奇しくも、五十年前に仇を探し血眼で
駆けた、ドルドアの城だった。

人生を賭してでもその首を断つことを願った怨敵が、一撃で剣を
弾かれ怯える様を、なぜかどこか遠くのことにように感じていた。

そして、この一振りが同時に己の生きる意味を失わせるだろうこ
とも。

そうだとしても構わぬほど、もう疲れ切ってしまったていた。

剣を振り下ろすその時、ドルドアがつぶやいたのは、小さな謝罪
の言葉だった。思わず止めた剣を握る手に、王女の小さな手が重ね
られた。

イヴォールフの父親殺害は、親に命じられたこと。追放された職
人達を奴隷化したのは、恩があるために彼らなら命に反してくれる
と思っただけにも関わらず、本当に友の父を殺してしまったことへの
罰のつもりであったこと。

次々と、ドルドアの口から吐き出される真実を、イヴォールフは
ただ黙って聞いていた。

やがて全てが語られると、彼は剣を落として膝を着いた。

赦す、とただその一言の下に。

ドルドアの人生を、そして恨み恨み恨んで時を過ごした自らの人

生をも全て赦し、雄々しき竜は涙した。

その後、一月の時間をかけ、この領地の荒んだ法を正し民のための執政の基盤を成し終えて、イヴオールフは王都に戻った。

そして真っ直ぐにラティフィーンの元へ訪れると、開口一番にこう述べた。

『若いころには柵が多い。中年にはもっと多い。だが老いも極まれば、囚われるものも己で選べますじゃ』

そう笑って、再び騎士になることを乞うた。

「イヴオールフ。貴方には騎士団の「砦」の称号を与えます。聖青花は、ミリテリアを贈り、その証にその花紋を刻んだ 青銀器の耳飾りを」

青銀器 を手にイヴオールフへと近づくが、彼は一向に手を出して受け取ろうとしない。常の好々爺の顔に戻ってにこにこ機嫌良くただ待っている。

（前の時も思っただけど、耳に穴開ける型じゃなくてほんと良かった）

それならば怖くて着けることなど出来ないところだったと、ラティフィーンはすでにある銀器のある反対の耳へ手を伸ばすが。

「おっと姫様や、わしはこちらにいただきたい」

とんと、前の式で授与された 青銀器 の少し上を叩いて示す。

「えっ、そうなの？」
いきなりの要望に驚いたラティフィーンは、ついいつものように聞き返してしまった。

「なんでも、最近の若い者もんの間では、それが流行しているのだから。せつかくのこの老物ろうぶつの心機一転の儀ですぞ。まだまだ若衆わかしゅには負け

んとする意気込みの表れですじゃ」

そう齒をちらりと見せ笑った翁は、横からかかる「どんだけ若いもん好きなんだよ」の声を無視した。

少し呆れた気持ちになりながらも、ラティフィーンは望まれた通りに耳飾りを着けると立ち上がった。突然強く吹いた風に目を伏せ、再び見つめたその先には、老いし兵^{つわもの}が覚悟の眼で見上げていた。

「私が選んだ 聖青花 は、冬の霜で枯れその姿を消しても、春が来ると他のどの花よりも長く咲き続ける、藍^{さいせい}の再生花^か」

そう言つて円台へと振り返ると、ラティフィーンは腹に力を入れた。これから持たねばならないのは、かつて持ち主が「馬が二つに切れますぞ」と自慢した破格の長剣だ。

（これで怪我でもすればみんなに怒られる上に、メゼは泣く）

気合に任せ、えいやとばかりに持ち上げて、腕を震わしながら振り向くと早々に地面に突き差す。剣は驚くほど深く地面にめり込んだ。

ほんと、身を固めて見守っていた騎士全員が安堵の溜息をつく。ラティフィーン自らも小さく息を吐いて、それから気を取り直しイヴォールフへ向かった。

「受けますか」

「どうかこの老骨に、再生の栄誉を」

立ち上がると、イヴォールフは両手で柄を握つて剣を地から引き抜き、長剣を高く掲げる。

「わしは、握りの真中^{まなか}に紋を彫りますぞ。たとえ死しても、その御印をさらさぬことを誓いましょう」

再び剣で大地を刺して立つその姿は、まさに老いし古の竜だった。

「貴方にランサルニアの騎士の神と銀の乙女の加護を」

そう言うとは彼は横に置いてあった帽子を被り、少し持ち上げながらおどけたように礼をした。

それに笑って、ラティフィーンは再任の儀の最後の騎士を呼ぶ。

8 . 再任の儀 第六の騎士 マルティス

「最後に、騎士団第六騎士シャン・クルド。私が与えし名は、我が騎士マルティス。前へ」

軽やかに、耳の横で揃えて切った薄茶の髪を揺らし踏み出した足で、彼は体重などないような滑るような動きで歩く。この長身の者が多い中、小柄に見える彼は、まだ少年としか言いようのないほど無邪気な若葉色の瞳をしていた。少し丈の短い上着と短いズボンという年相応の緑色の平民衣装に、簡略化された色の薄い黄の短い外套を掛けている。

彼は早々に移動を終えらとぱつと跪き、早く動きすぎた体に遅れた外套が静かに背に帰るのも待たずに言った。

「姫さま」

少し高い真つ直ぐな声で、大切そうに彼はいつも仕えるべき者を呼ぶ。

「その名の意味は、マルティ・ルティス 清き風。貴方が私に授ける言葉は何ですか」

「大切なものを守るために、今までの弱さも怖さもぶっ飛ばして、新しく、心に風をいれること。その大切さを、僕は知っています」

マルティスは、自分がどこで生まれたのか知らなかった。気づけば、まったく同じ顔と背格好の子どもの手を握ってランサルニア王

都の最南端にある貧困窟に立っていた。

覚えているのは自らの名前と、その子どもが自分の片割れであること、そして母がここに連れてきたが、その母はもうここにはおらず絶対に二度と会えないところへ行ってしまったていることだけだった。

それから、ただ生き残ることが困難だった。

腹が減り、喉が渇き、同じような境遇の者が溢れる場所で、手に入るものは何もない。町に出て食べ物を盗み、誰よりも早く走れる足と何も言葉を交わさずとも考えていることがわかる相方が、生き延びる術になることを知った。

まったく同じ顔、同じ声、同じ考え、同じ感情を持ったその片割れを見ると、今自分がどんな顔をしているのがわかった。何もかも同じの外面と同じように、内側も何もかもが同じだった。

ただ一つ、この貧困窟に対する考えだけを除いては。

マルティスはこの貧困窟を多くの者が生き残ることが出来るよう変えたいと願い、片割れはこのままであることを望んだ。その差異が、まったく同一の世界を感じる半身であった彼らを引き裂くこととなった。

日々意見はぶつかり、話し合うことも困難となっていた。そうして硬直し、悪化していく関係となってしまうたのにも関わらず、面と向かって言い合いになりもう二度と戻れなくなることを心から恐れたマルティスは、何もすることが出来なかった。

そしてついに、マルティスの声も聞かず二つに分かれた勢力が抗争をはじめ、二人は殺し合う敵となった。失うことを恐れて、手遅れにしてしまった自分の愚かさを、悔やんでも悔やみ切れなかった。

もはやマルティスの手を離れてしまったその抗争に顔を突っ込んだのが、ラティフィーンだった。

王女は身分を隠してひよっこり現れ、二ヶ月かけて戦いつつ交渉を続けた結果、漁父ぎよふの利りを得ようとお互いの側近が裏で手を組み虚偽の進言で抗争へと唆そそかしていたことがわかり、事態は収束した。

もう二度と帰って来ないと絶望した半身は、マルティスと同じように、失うことが怖かったのだと彼を抱きしめて泣いた。その時、もう自分たちはどれだけ離れても、二つに分かたれることはないのだと気づいた。

だから、片割れが世界を見に旅立つのを見送り、マルティスはこの地で新しく増えた大切なものを守ることを決めた。

「マルティス。貴方には騎士団の「盾」の称号を与えます。聖青花は、マルティスを贈り、その証にその花紋を刻んだ 青銀器の指輪を」

言い終るや否や、まだ 青銀器 を持つてもないラティフィーンへマルティスが素早く両腕を伸ばした。

「あつ！ えへっ」

どう見てもわざとらしい笑い方をして、すでに前の 青銀器 のある右手を引つ込める。

それに苦笑しながら、銀器を手にしたラティフィーンはマルティスの前に膝を着くと、左手を取り、その中指に静かに指輪を通した。

「私が選んだ 聖青花 は、多くの細かな葉を茂らし、塵を押さえ風を清める薄青の清風花せいふうか」

にこにこ指輪とラティフィーンを交互に見ては笑うマルティスに笑い返しながら、ラティフィーンは円台へ戻り剣を握ると、その前に着き立てた。

「受けますか」

「はいっ！ 姫さま」

元気良く答え立ち上がると、外へと反った三つの鰐を持った特殊な、少し細身のその剣を片手で持ち、高く掲げた。

「僕は、鰐つばに紋を彫ります。迫せまる剣を遮る、僕はあなたの盾になりますから」

透る様に、けれど毅然とした覚悟で真っ直ぐに背を伸ばした姿は、何よりも頼もしい。

「よろしくね、ティス」

「もちろんです！ 姫さまっ」

嬉しそうに応え、尾を振る子犬のように愛らしいこの姿は、彼の本性とはかけ離れていると知っているのに。

（でもやっぱり、こうやって笑っているとほんと可愛い）

「貴方にランサルニアの騎士の神と銀の乙女の加護を」

言祝ことほぎを受けたマルティスが笑顔を増し、満面の笑みで手を頭上へと高くかざした。すかさずにつこりと笑ったラティフィンが飛び跳ねて、勢い良く手を合わせる。空まで響いた胸のすくような清々しい音が、高らかに鳴った。

それに騎士全員が、暖かい笑みを浮かべる。それを見渡しラティフィンはもう一度笑うと、王女の荘厳さで言った。

「皆みなが与えしその言葉こそが私の光。私が成すべきことを成すための、標しるし。どうか共に、歩んでください。皆の心は私の心、私の心は、皆に預けます」

その言葉に、六の騎士は再びその場に跪いた。

「これで、再任の儀を終えます」

丁寧な、一句一句をなぞる様に、ラティフィーンは声にする。騎士達が立ち上がるのを確かめると、ゆっくりと一度目を閉じ、視線を上げた。

その先には、光を吸っては閉じ込めているような漆黒の髪青年が、新雪色の瞳でこちらを見つめていた。

9 . 着任の儀 第七の騎士 ユイ

「これより、着任の儀を執り行います。新たに私の直属騎士団に所属し第七騎士となる意志を持つ者、黒の知者が開きし隣国タトアント皇国（おうえいこく）、皇位継承権第一皇子ストウアラ。我が仮に与えし名をユイ。前へ」

音も気配もなく、彼は漆黒の髪を揺らし、芸術品のように整った顔に無表情を載せて歩く。

髪と同じ漆黒の、しっかりと体に添った広く肩の出た薄手の長袖と、機能性の良い鞣革（なめしがわ）のズボンを膝下まであるブーツに入れ、すらり高い背でも闇に紛れる出立ちをしている。

夜闇のようなその姿の中でただ一つ、その瞳のみは雪のような白銀。けれどその美しい不思議の瞳には、硝子のような無機質さがあつた。

無音で歩きマルティスの隣に並ぶと、ユイは立ったままラティフインと向き合う。かつて銀の乙女がある者を騎士とした折の神話に準え、まだ騎士の地位を受けていない者には膝を付かせてはならないという習わしがあるためだ。

第四王女は、静かに音を紡ぐ。

「貴方は我が騎士となることを真に望みますか」
「ああ」

無駄のない淡泊な答え（こたへ）をするその声は深く、それでいて雪のように澄んでいた。

「では問います。貴方がこれまでの人生を賭し、得たものは何ですか」

「月だ」

短過ぎるその答えは、在り得ないものだった。彼の生まれた隣国タトアントではまさに、どんなに欲し嘆いても絶対に届かないものの代名詞として用いられている。

それでも、ラティフィーンは静かに問うた。

「その意は、いかにありますか」

それに、今まで淡々と答えていた彼が黙る。ラティフィーンも黙り、静かに待った。しばらくの静寂の後。

「俺は、死せよと生まれ落ちた」

少し目を伏せ、未だ思案するように彼はゆっくりと述べる。

ユイは、生まれ落ちたその時に皇位を奪う子と預言され、おつ皇の懷ふところ刀がたなであり恐怖政治を行つための牙とされた暗殺者集団 深淵しんえんの賽さいへと投げ落とされた。

父皇であつたルーニリ・ザルド・タトアントは、力ない預言師の言葉を信じ皇位剥奪を恐れ、先に生まれた二人の皇子も同じように処し、殺していた。

『闇に溶け堕ち消え失せる』

その呪言じゆこんそのままに、彼が得た名はストウアラ 漆黒。

誰もが暗殺者の中に放り込まれた赤子に未来はないと予測したが、しかしユイはそれを裏切り、生き残った。けれど、成長したその様は感情すら持たぬ人形と違わず、言われたことのみを淡々とこなすその姿に、反逆など起こすはずもないと皇は安堵し放置した。

「匂い立つ血も見えぬ闇に生まれ、息をし、それ以外のものは何ひとつなかった」

それでも彼は生き、刃を振るい続けた。それが何故だったのかは、今になってさえユイにはわからない。

生き残るのは、生まれながらにずば抜けた才がある者だけの中で、深淵の寶 において史上初の最高戦闘員 一の目 の位と、恐怖政治のための諜報活動などを行う政事要員の最高位の兼任を、たった十七にして任されることになるほど、ユイの持つ力は別格だった。

その任命から三年が過ぎた約七ヶ月前、ユイは常とは異なった密命を受けた。ランサルニアから攫さらわれた第四王女を政敵である前皇皇子の城から奪い、その利を得るため連れ帰れ、というものだ。そして攫さらった後も、送られてくる兇手からの護衛として付けと命じられた。

「ただ……お前に出会って」

殻に包まれ守られていた種が春に芽吹くように、心が動き始めたのを、胸の内に生きた何かが脈打つことを、知った。

「月も星もない漆黒の闇空を、見上げ続けてきた意味を、知った気がした」

心無き 漆黒 の器として無だった頃から、気づけば闇ばかりの空を見つめていた。

何かを、待つように。その、意味を。

「終わらぬ闇に灯るものを、俺は得た」

漆黒の夜空を照らす、祈りのように澄んだ月影。

「それでは、不足か」

泣きそうな想いでユイを見上げていた王女は、いいえと応えるので精一杯だった。

あの囚われの六ヶ月の間に、ラティフィーンは彼の苦しみを傍で見続けた。

その終わりを願い命を賭けて奮い立つ程に、それはまさに闇だった。

それを越え、今彼が私に授けるもの（おもい）。

タトアントでの最後の夜、雪を割り一面に咲き誇る冬の終わりの花の中、彼が口ずさんだ祈り歌の小さな旋律が、聞こえた気がした。

「いいえ、我が騎士よ。貴方を、心よりの信頼と敬愛と共に私の許へ喜び迎えます」

一生忘れないだろうと思いつながら、あの澄み冴えた水面のような美しい声に浴し誓ったこと。

（あるとき、私は彼の人生を受けることを決めた）

「受けて、いただけますか」

「受けよう」

再び簡潔な答えに戻ったユイが、目を合わせたまま膝を折り、跪く。

「ラティフィーン」

やっぱりあなたは、騎士になってもそう呼ぶのねと、切ない思いが瞳を潤ませる。

けれど、ラティフィーンは笑ってみせた。

「この時をもって、正式に貴方を我が騎士とします。そしてその証のはじめとして、剣を授けましょう」

真白の円台の上に乗る最後の品である剣を取り、すでに立ち上がったユイに手渡す。その刃を下にしユイは少し傾けて構えるように掲げると、新雪の瞳で真っ直ぐにラティフィーンを見つめた。

「俺は、お前が俺に許す限り、必ずお前の元に戻るう」

この言葉が、どれほどの闇を越え辿り着いたものか。私たちは、よく知っている。

「月が、お前への道を照らすだろうから」
ぎゅっと締め付けられた胸を、抱きしめてラティフィーンはもう一度笑った。

「月が、貴方を照らさずとも。私は、貴方を待ちます。……貴方は必ず帰ってくるから」

「……ああ」

小さく、光を見つけた漆黒が、笑った。

9 . 着任の儀 第七の騎士 ユイ（後書き）

これでやっと騎士の自己紹介はとりあえず終了。

少しでも、彼らを気に入ってくださったならば、望外の喜びです。

これからは堅苦しいのが苦手な彼らが、いつも通りに戻ります。

10・ 姫とつかの間の休息

「はあゝ、舌噛みそうだった……」

式の全ての終わりを告げた後、思い切り伸びをしながら、ラティフィーンはため息と共に緊張を解いた。

その地位からは考えられないが、王女と騎士達は自らごそごそと円台や椅子を定位置に戻しながら常の砕けた様で会話をはじめていた。

自らの右隣へとまだ名も彫られていない椅子を置いたユイを、申し訳なさそうに見上げ、王女が謝罪する。

「ごめんねユイ。正式な騎士名がまだ決まっていなから、青銀器とか渡せないの」

もう、隣国タトアントから帰って一ヶ月半が経っているにも関わらず、ラティフィーンはなかなか彼の騎士名を決められないでいた。今までならば、出会った瞬間に思い浮かぶことがほとんどだったのに、ラティフィーン自身戸惑っている。

「銀器自体はもう出来てるから、あとは彫るだけなんだけど……」

「好きにしる。俺は構わない」

気にもしていないふうにされると、それはそれで悲しい気がするが、ラティフィーンは素直に有り難く思うことにした。実は、すでに聖青花は決まっているのだが、一度に渡したいので黙っている。それでも、名が決まらないことに罪悪感があるのは否めないが。

「姫さま、今回 あおぬの 青布 はなしなんですかー？」

円台はラティフィーンから左回りに騎士の就任順に並んでいる。椅子に座ったユイの横から、マルティスが身を乗り出してラティフ

イーンの顔を覗き込んだ。

その第六の騎士の丁度対角に座った第二騎士クラーフェルドが、呆れたように唸る。

「これ以上いらねえだろう。前回、染物屋が面倒だろうからって一度に二十枚も渡されたんだ。……お姫が持つてくれた方が有り難味があるのに」

拗ねたように口を尖らせながらも、自身の右の二の腕に括ったヒンテマリアの青紫をした青布を大切そうに撫でる。

この布は、ここ 青園の白花 にある騎士専用の椅子のように、騎士名・聖青花・青銀器の他に与えられる騎士団の証。それぞれ与えられた聖青花の花を集めて染められた、騎士によって色の異なる、彼らにとっての聖布^{せいふ}。

「もらっているだけでした。俺には、染める花さえない」

何の偶然か気持ち良く吹いていた風まで止んで、黒尽くめの騎士の発言に奇妙な沈黙が生じる。

正直、六ヶ月間片時も離れず共にいたラティフィーンを除いた騎士達は、他国タトアントの皇位継承権と独特の雰囲気を持ったこの新たな騎士の存在を計りかねていた。未だ聖青花が与えられないことを責めているのか拗ねているのか、はたまた有り難味がないとぼやいたクラーフェルドを諫^{いさ}めているのか慰めているのか、現在もその言葉の意図を悩むように。

「あゝ、ちなみに今のはただ事実を述べただけ。に、ちよっぴり慰める気があった……気がする」

「そうなのですか？」

助け舟をと代弁を試みたラティフィーンに、不思議そうにルクレシアが聞き返した。しかしその返答はたぶん、きつとなど、どんな曖昧なものに変化しついに消えていった。

真横で起こる二人の会話を清々しいまでに聞き流し、当事者はい

つの間にか取り出した暗器あんきの手入れをはじめようとする。果てなく自由な彼を止めたのは、麗わしの猛者だった。

「え〜、……ユイ殿、貴殿は今おいくつなのですか」

空気を変えようと多少無理やりながらも、現在十九歳のメゼリエラはこの一ヶ月半気になり続けたものの機会を逃し続けた質問をぶつけてみる。わしも気になっておつたと、イヴオールフが加勢した。円台をはさんだ真っ直ぐ先の女騎士を見つめ、漆黒の髪さえ動かぬほどほんのわずかに右へ首を傾げて、暗器を置いたユイは無表情のまま質問にずばり答えた。

「二十歳だ」

「は……っ、はたちいい?!」

同時に上がった幾人かの大声が 白花 に響き渡ると、絶叫された本人は、常よりも瞬きを増やしてさらにわずか右へ首を傾けた。

「……私よりも上だと思っていた」

三つは上という予想に反し、二つも年下というあまりに意表を突いた回答に、流石の真なる騎士ルクレシアも驚きを隠せず思わずつぶやいた。

それを見たラティフィーンがうんうんと深く頷く。かつて自らもした懐かしい反応だった。

「見た目と違いすぎる年齢……か。あの、僕もう一人……年が気になる人がいるんですけど」

「何、わしかな、マル坊。わしは今年六十じゃよ」

ちらりと向けた視線に應えて、穏やかに笑う老騎士に、マルティスは何とも言えない苦い顔をした。

去年の七月末、騎士となつてすぐに自らが持つすべての情報網を用いて騎士達のことを調べ上げた。新たな場で己の力を最大限に活かすため情報が必要だったからだが、しかしどの角度から見ても六

十には微塵も見えないこの若作り古狸ふるたぬきに関しては、ただの年齢さえ確かなものは知れなかった。

笑顔で見詰め合いながらも、どこか黒い気配を漂わせる自称六十の老人と記憶がないため自称十八歳の少年を見やりながら、同じく二十一の二人の青年がぼそぼそと囁き合う。

「私が計算したところ、これでも若く偽っていますよ」

「……やっぱ化けもんだな」

聖青花の騎士団　の智慧を司る賢騎士がそのモノクルを押し上げ、数多の過去の文献の情報を組み合わせ算出した結果をつぶやくと、金の髪の子はぞっとして素直な感想を漏らした。

「さてと。そろそろ次の作戦予定時刻になるかな……。みんなちょっと聞いて」

ここまで小さく笑ってやり取りを眺めていたラティフィーンが、頃合いを見て注目を促す。全員の目が向けられたのを確認すると、王女は話し出した。

「今までずっとと言って来た事だけど、まだ聞いてない人もいますから。一番の基本をもう一度確認しておくっ」

ラティフィーンが気合十分に椅子を詰め座り直すと、騎士達は再び背を正した。それを見届け、王女は目を閉じ大きく息を吐くと、王女の意識に切り替え、皆を見据えた。

「私は、王女でなかったら何の特殊な力もない、ただの娘です」

その一見己を蔑むような言い方を、もう何度も聞いているはずなのに、我慢出来ずに反論するメゼリエラに笑ってラティフィーンは続ける。

「でも、私にはみんながいる。威厳も、器も、智慧も、美しさも、重厚さも、速さも、腕っ節もないけど。みんながいてくれる。わからないことだらけの私を、助けてくれるみんなが」

そしてラティフィーンは、心から笑った。

「みんなこそが、聖青花の騎士団の、私の一番大事な宝です」
風が彼女の黒髪をなびかせ、空に舞ったいくつもの青い花弁が真白の大理石を撫でては去って行く。

「だからいつでも、私が一番に願うのは、みんなの無事の帰還です。どうか忘れないで」

騎士達は、己が姫の様をじっと見つめそれぞれ、心に二度と消えぬようその言葉を刻み込む。

必ず、この優しく尊い願いを叶えるために。

「剣が折れて、柄が砕けて、銀器が潰れて、誇りが消え失せても。ちゃんと私のとこまで帰ってきて」

それでも、何があっても、どうか生きて帰ってきて。

「約束よ、忘れないでね」

泣き出しそうな祈りで、ラティフィーンはそう願う。だから。

「紋があるうが思う存分柄でも鎧でも、銀器でも殴り飛ばしなさい！」

少々物騒な言葉にも、ラティフィーンの？紋や青銀器を庇ったために怪我などして欲しくない？という思いを感じて、騎士達はその温かさに笑う。そして、各々が、各々の言葉と態度ではっきりと、必ず守ることを示した。

だったら、自分がすべきことは、信じることだとラティフィーンは思う。彼らは、この祈りに応えて続けてくれた。だから、ラティフィーンは絶対にそれを信じる。

信じるから、彼らを送り出せる。

「じゃあまずは、手始めに人の誕生日祝いを邪魔しようとする悪党たちを退治しちゃお」

十二分に懲らしめてね、と加えにやりと笑う。それから、再び花咲くような満面の笑みを浮かべた。

「作戦、再開。みんな、気をつけていつてらっしゃい！」

その笑顔は、王女のものではなく、少し幼く見える彼女本来のもの。それを見た騎士たちは満足げに、あいわかったと散って行つた。その後ろ姿を見つめ、最後の一人であるルクレシアの背が消えた後、ラティフィーンは空を見上げる。

「良い天気だなあ……」

雲ひとつない真つ青の空と見渡す限りの真つ青な庭。真上から差してくる太陽の光もそよぐ風も、文句の付けようもなく清々しい、のに。

これから起こるであろう困難たちに、ぼろぼろになる自分たちが容易く想像出来る。

今日これから日が沈むまでに、ここまでの準備が実行される。

今は、ルクレシアとユイが迎えに来るのを、少しばかり待つただけだ。

式を終え、ラティフィーンはなんとなく自分の今までを思った。

今から約十八年前、立国暦七九四年、麗春の終わり。

第五十二代ランサルンア王国国王と第三王妃の間に、ラティフィ

ーンは二人王子と三人の王女の下、末子として生まれた。

父王は良君と名高き、かつて腹の中から警告を発し父王を助けた伝説を持つ、その眠りに大いなる流れの意思を受ける比類なき夢見の預言師。その天啓によつて、彼は地方のしがない領主の三女であった母を娶った。

后の中で最も愛されながらも、ラティフィーンに自らとまったく同じ透るような黒曜石の髪と、夜闇に光を照らされると不思議にう

つすらと青く光る黒瑪瑙の瞳を残して、娘が七つになる少し前に彼女は亡くなった。

かけがえのない存在を失った悲しみの中、そばで支えてくれたのは、五つの頃から共にいた同年の幼馴染。大陸の左上に位置する領王国ユリアントレッタから留学していた第三王子だった。おかげで今でも、頭が上がない大切な存在に居座っている。

そしてそれから三年が経った、十の誕生日を迎えた夜。ラティフ・イーンは運命の人と出会った。

それは小さな少女であった彼女に、王女としての器と信念を授けた、彼の師。ラティフ・イーンを救国の姫君と呼ばれるにまで至らせたのは、目も眩むほど輝いた、彼とのこの五年間だった。

そうして、今。

「もう十八、かあ……」

青の楽園の端に、白と黒の騎士がこちらに向かってくるのを見とめ、少女は歩き出した。

目を閉じてたくさんの想いを抱き締める。溢れて今にも流れ出しそうになるものを、必死で掻き集めて。

これからの作戦と部屋に戻れば扉が開かなくなる程部屋中に氾濫した資料の確認が待っていることで思考を埋めながら、ラティフ・イーンは何かをごまかすように青い息を吐いた。

10・ 姫とつかの間の休息（後書き）

次から、各騎士が散ってみんな好き勝手やります。

騎士たちの素が、ボロボロと露見することに……なる、はず。です。

そつと……遠くから半眼くらいで見守ってやってくださいませ。

11・個別作戦 豪騎士は、破壊魔。

なだらかに弧を描く丘の頂に、ランサルニア王国の王城は建てられている。

しかしその周りには、城をぐるりと広範囲に渡って包み広がる庭園はあるものの、囲う壁は一切存在しない。

それは、神話において語られるランサルニアの建国をなした銀の乙女の時代から変わらないものとされている。人の位を隔てるための王位ではないことを長き時を経ても民に、そして王に刻むためのもの。

数千年の時を越えて、内乱が起きた時代であつても時の王の固い意志により受けつがれてきた、王の、そして民の誇りとなっている。

その庭園の端、広大な王城域の終わりには北と南に分かれて二大貴族の屋敷がそびえ立っている。そしてその地から後方へと、貴族が主に居住する地区？王徒区？となる。かつては王へ馳せ参じるに疾く、王に仇なす者から身を盾として守らんと貴族が集つたためにその名が付いたが、今では世襲制に胡坐をかいた貴族の地となっている。

王徒区の屋敷は、一つひとつは豪奢で大きなものであるが、城下街全体として見たときには、それは大した規模ではない。ランサルニア最大の都市であるこの城下街の九割以上を占めるのは、均等な放射線状に十六の大通りが走り、その間をはしゃぐ子どもがつくつたような小道が縦横無尽にはしる平民市街地。

その規模といえば、地方の主だった都市をすべて集めても負けぬほどで、所狭しとありとあらゆる種の店がひしめき合い活気と喧騒と笑顔に溢れている。そのあまりの広さゆえに市街地は大通りによ

り十六区に分けられ、さらに内・外で二分化され呼ばれていた。

そんなランサルンア城下街でも城に程近い、貴族屋敷と平民家屋が入り混じった、とある王徒区と市街地の境。

建物の屋根や壁色、家の前に置かれた像などは、一つひとつを取って見れば美しいが、あまりに個々の美意識を主張しているため、もはや乱雑な印象を受けるその場所に、隠れるように存在する情報通の貴族もお忍びで利用する品の良い酒場がある。

昼間から賑わうその店に、輝く金糸のような髪の方が入っていく。堂々とした歩みで、するすると人を除けて進み、どつかと最奥の一等高級なテーブルにつけられた椅子に腰をおろした。

「お、注文頼むぜ。春鳥の姿焼きと兎肉のスープ、ちゃんと兎の尾っぱは切ってくれな」

「……畏まりました。では、御案内させていただきます。こちらにお越しくださいませ」

無表情な店の娘の無機質な声での対応にも、クラーフェルドは機嫌よくにつと笑って立ち上がる。

合言葉が？尾のない兎？ねえ。密輸で張ってんならもつと珍しいもんにしろよ。

まあ、それくらいがお似合いかとつぶやいて、そのまま歩き出した娘の後ろに続き質素な荒い木目の二つの扉をくぐると、貴族でもめったに目にしないような硝子と金細工の豪華な扉が現れた。

「では、私はこれで」

「おつ、ありがとさん。あ、それとな」

突然瞬きすれば見えぬほどの早さで腕をつかまれた娘は、一瞬身を震わせ耐えるように押し黙る。その耳元に顔を寄せ、その近さで

やっと聞こえるほどの声で言った。

「少し、騒ぐことになる。危なくなるから適当に逃げておけ」

はっと顔を上げた娘に、クラーフェルドは優しく笑った。

「いいな？」

ぎゅっと掌を握り締めただけの反応は意に介さず、クラーフェルドは扉へ向き直った。

「行け」

一礼して去っていく娘を見えなくなるまで見送り、クラーフェルドは深く息をついた。大きな手で頭を掻きながら、もう片方の手を扉にかける。

あの娘がクラーフェルドの侵入を店側に知らせることは、大いに在り得るのだ。

前に確立は二分の一くらいだつて言ったら、シュツに殴られたんだよな……気絶、もうしたくないぜ。

はあーっと、もう一度大きくため息をつく。

「しゃあない、性分だ。とにかくさっさと片付けらあ」

気を取り直して金のドアノックを握り、振り下ろす。密輸交渉のための合図は、4回だ。

ガシヤアアン！！

金髪の大男がごく一般的な力を込めたドアノックが扉に当たった瞬間、見事に蝶番ちょうつがいが外れ精巧な硝子細工を無残に散らしながら大きな音と共に金の扉は地に倒れた。

扉にかけていた手は、取れた金細工のドアノックを掴んだまま所在無さ気に宙に浮いて。

「あ……………ヤバ、」

先程まで扉のあった木枠の先には、立ち上がったいかにもその道である五人の男が鋭い眼光をむけ、すでに剣を抜いて単独愚かな登場をした獲物を嘲笑っていた。

が、そんなものは今の彼にはどうでもいい。

またお姫に破壊魔だって怒られる……っ！

がつくりと肩を落とし、同時に手から握っていたドアノブを落とすと、姫の溜息を想像して叱られた犬の耳のように、その金髪を垂らす。

「……交渉過程で情報も聞き出すはずだったんだけどなあ。お姫、怒るかな。……呆れられたら、俺立ち直れねえ」

己の力加減のせいというよりなぜかその物の寿命によく当たる不幸體質を嘆いてため息を吐くクラーフェルドを、半円を描くよう男たちが囲んだ。

それをちらりと見やり、もう一度深く溜息を吐き出すと、クラーフェルドは肩に手を当てぐるぐると回す。

そして暗かった表情を一転させ、にやっと、機嫌のいい獅子のような笑みを浮かべた。

「戦闘途中の事故、なら問題ねえよな。……すげえ派手にやろつと」

それから十分の時を数える頃に、青空を割るように景気の良い鐘が二つ鳴った。

11・個別作戦 豪騎士は、破壊魔。（後書き）

彼が鳴らした作戦終了の合図の鐘は、二打目で綺麗に叩き割れました。

12・個別作戦 賢騎士は、怪力。

「ふん。本来ならば叩き出してやつてもよいが、我は今機嫌がいい。……どうだ、我が選んだ者と戦盤で勝てば、話くらいは聞いてやるう」

北王徒域の一角の館で、体に合わない大きな椅子にふんぞり返った貴族の男が、部屋の隅に列をなす私兵たちを見やりながら傲慢に言い放った。

「その深き御慈悲と御心に心より感謝し申し上げます、閣下」

胸に右手を当て深く腰を折り、女ならば羨まずにはいられない麗髪をさらさらとこぼして、シククラツイーレは最敬意礼を取った。

その濃い茶の完全なる帳の中、蔑みの嘲笑を浮かべながら。

偽りの礼により膝を付くことなど、造作もないこと。この館の扉を叩いてからここまでの全ては彼の予測通りであり、この最敬意礼もこの様な矮小な男などではなく、膝を付く前に一撫でした銀のモノクルを授けた姫へのものなのだから。

目の前に運ばれてきた、金と宝石で出来た悪趣味なほど豪華な戦盤に、シククラツイーレは触るのも嫌だと内心うんざりした。戦盤は道具を表す手札と盤上の駒を用いて行う、その大会も年に数度行われる程貴族平民を問わない国民的人気を誇る遊戯だ。

その前大会での準優勝者が、戦盤を挟みシククラツイーレの前へと座った。

開始、五分。ことりと駒を鳴らし、前大会での優勝者を秘密裏

に弟子に持つ賢者の騎士は、あまりにあっけなく勝敗を決めた。

「誠に僭越ながら……約束を覚えておいででしょうか、閣下。あ
あ、と申しましても瑣末なことを一つお訪ね申し上げただけなの
ですが」

「……っ、申せ」

勝負に負けた男を鬼のような形相で睨みつけ屈辱に唇を震わせな
がら、なけなしの自尊心で男は唸る。

それにくすりと嗤って、勝者はすらりと長い足を組んだ。

「はい。先日、閣下はタトアント商人集団と大きな取引をされたよ
うですね。私兵の武具、と位置づけて購入されていたようですが…
…私の見る限りとても閣下が所有する兵では使えきれない数です。
……では、それはどこへ消えてしまったのでしょうか？」

さつと赤土のような色に首まで憤怒に染め顔を歪ませて、男は怒
号を上げた。

「今すぐその者を捕らえ殺せいつ！」

「はあ……どこまでも、愚かな選択ばかりですね」

殺してどうするのでしょうか。

思わず笑ってしまいながら、ゆったりと、余裕の素振りでは彼は受け
たばかりの銀のモノクルを撫で上げる。その背には、今まさに大剣
が高々と振り上げられていた。

「ですが、少しは面白くなりました」

うつすらと口端を上げつぶやいた言葉は、金属が激しく打ち合う
音に掻き消える。

剣を握る手に思わぬ衝撃を受けた兵士が身を硬直させたその瞬間、
男は後方に魔法のように吹き飛んだ。

「なるほど。名高いタトアントの専門職人を姫君への忠心でまる二ヶ月拘束して作らせただけのことはあります」

愉快そうな瞳には、頭上から振り下ろされた大剣の一撃を受けてなお、傷一つない手甲が映っている。

「伝わる衝撃も、以前より大きく軽減されています。……実に素晴らしい」

ため息をつくように満足げに賞賛の言葉をつぶやき、こつりと、細身のブーツを綺麗に鳴らして並み居る私兵へ振り返る。

「さて」

手をのばして懷から何かを取りだそうとするシユクラツィーレに、私兵たちが一斉に身構えた。しかし、出てきたのは小さな青緑色の布一枚。一瞬にして吹き飛んだ兵士の惨劇を思うと動けずにいる私兵たちを無視し、シユクラツィーレは髪を掻き上げその布を巻きつける。

それこそが、真の惨劇のはじまりであるとも知らずに。

きゅつと小気味のいい音を立て、布が引き結ばれた。

上げていた腕を下ろすと同時に、ふと、何かに気づいたようにシユクラツィーレはモノクルを弾く。

「姫がまた昼寝をしていないか、早く戻って確かめなければならぬのを忘れていました」

それから二十分を少し過ぎた頃、青空を撫でるような鐘の音が三つ鳴った。

12・個別作戦 賢騎士は、怪力。(後書き)

鐘を鳴らすまで少し時間がかかったのは、クラと一緒にされたくなくて暴れた部屋の証拠隠滅をしていたからです。

13・個別作戦 女騎士は、迷子癪。

北市街地のとある大通りを真昼の空の下、二十の兵が二列に並び、美しい程完璧に歩を合わせ行進している。常ならば笑い声の混じった喧騒で賑わっている通りの商人たちも、あまりの珍事に皆手を止め不思議そうに様子を見守っていた。

と、突然先頭を切っていた赤毛の馬が止まり、騎士が舞うようにその身を滑らせ降り立った。

ざっと、最後の一足の音を残し、兵も停止する。

完全に無音になったその場を一人軽快な靴音を立て移動し、騎士はぽかんと立っていた果物屋の女性に声をかけた。

「御婦人。この辺りにフェレッテ橋があると聞いたのだが、場所をお教えていただけるか」

騎士に直接話しかけられたとあって緊張し強張っていた女性の顔が、再びぽかとなる。

「フェレッテ橋なら、城を挟んでちょうど反対側……だよ？」

「……………そうか」

まったくの逆、北市街地でさえなかった衝撃にたつぷり黙り込んでから、メゼリエラは一言そう答えた。

気まずそうな女性に短く礼を述べると、赤髪を風に攫わせ騎士は颯爽と兵の元へ戻る。

馬には乗らず、彼女は兵たちを見回し高らかに声を上げた。

「皆に、問う。道を……いや、そ……の、」

しかしその途中から先程までの思わず背筋を正してしまう凜々しさに打って変り、ためらうように口の中である、そのと繰り返しは

じめた。

全力をもって己が隊長の問いに答えられるよう気を引き締め、真剣な面持ちだった兵たちが、一様に首を傾げた。その様を見たメゼリエラは、ますます追い詰めらる。

ああ、姫！ 私にはやはりできかねます……っ！

メゼリエラは込み上げる羞恥に耐え切れず心の中で叫ぶが、その時浮かんだラティフィーンの顔に、ぐっと手を握り締める。

（否。早くせねば……姫の御身が気がかりだ）

一番に彼女の許に戻り、姫のご無事を確かめたい。

きゅつと唇を噛み締め、激しい葛藤を振り切りメゼリエラは覚悟を決める。その気迫に、兵たちは一斉に息を止めた。

そして、メゼリエラが口を開くのを固唾を吞んで見つめる。

「頼む、いや……いえ、……頼み、ます」

常からの、隊員全員が憧れるきっぱりとした口調が崩れたことに、彼らは先程の夫人のようにぽかんと口を開けた。しかし、二十の半開の口も、軽く俯いたメゼリエラからは見えない。

「橋まで連れて行け……ではなくて、……く、ください」

？ください？の前に軽く唇を噛み締め、凜々しいはずの騎士は視線を彷徨わせる。

「お……お願い、します」

耳まで真っ赤に染めて顎が胸元に付くまでうつむき、舌頭を下げ両手を握り締めてやっこの思いで言い切った。その紅蓮の騎士に、日ごろ鍛錬を共にする兵たちだけではなく、通りの見物人全てが一人残らず半開きであった口を顎が外れそうになるまで広げた。

鳥も鳴かない長い沈黙。

身を谷へ投げるつもりで告げたメゼリエラは、あまりの反応のなさに気絶しそうになりながらも、必死でラティフィーンの言葉を心の中で繰り返す。

「ちゃんと、お願いするんだよメゼ。女の子らしく、ね？」

迷子になって誰かに道を聞くなら、と彼女の最愛の主は言ったのだ。

そう思い直し、姫との約束は死んでも守るのだという覚悟でもって、とにかくもう一度告げてみようと思いに決め、メゼリエラは真っ赤に染まった顔を上げた。

そこには、同じく顔を真っ赤にした見慣れた二十の顔。

「え？」

驚き先程までの周りのようにぽかんと固まったメゼリエラの目の前で、彼らは突然怒号のような雄叫びを上げた。

そのまま、いきなりのにびくりと肩を震わせたメゼリエラを馬の上へ担ぎ上げ、面食らったままのメゼリエラを乗せた馬の周りにわらわらと集まると、馬を反対の方向へ向け手綱を引いて走り出す。

「えっ！？おいつ、お前たち！」

メゼリエラの抑止の声も、主のはじめでの？お願い？に感極まりきっている彼らには聞こえない。

来た時には考えられない速さと騒音で、彼らは怒涛のように走り去った。

呆然と見送った町人たちの一人が、兵の叫びが聞こえなくなった頃、ようやくとつぶやく。

「あれが……可憐の騎士の？望む地へ辿り着けない呪い？……？」

「騎士の手紙の話は、本当だったんだ……っ！」

それから約三十分後、未だ商売もそつちのけで聖青花の騎士団を描く謎の小説家集団 騎士の手紙の話で盛り上がっていた町人たちには、清廉とした鐘が四回鳴ったことに気づく者はいなかった。

13・個別作戦 女騎士は、迷子癪。(後書き)

この後目的地での役目も興奮した兵たちがすべてしてしまったので、彼女のこの日の仕事は任務完了の鐘を鳴らすだけだった、とか。

14・個別作戦 老騎士は、年齢不詳。

南の市街地中心に位置する、八番大通り中央。

城下街でも最も賑わいを見せる市が日の出と共に始まり、移動さえ困難なほどこった返していた人通りも正午を過ぎた今はいくらかの落ち着きを取り戻している。

その中を、焦げ茶のカウボーイハットを深く被り色を落とした白のシャツの胸元を開け、くつきりとした鎖骨をさらした男が歩いてゆく。その肩には成人男性の身長を軽く上回る、同じく深い茶の皮製の細長い荷がかかっていた。

その静かな足取りと穏やかな雰囲気により、忙殺からようやくと解放され休憩に入りはじめた通りの人間には、意識もされないただの通行人だ。

しかし一旦彼を見止めれば、話は違う。

汚れた布を足元の桶で洗い立ち上がり様に顔を上げた年若い乙女から、ようやくと昼食のために椅子につき腰を叩いて伸ばしていた老婆まで、桃色の花のように頬を染め過ぎ去る彼を恍惚として見つめるのだ。

前からも後ろからも送られる多数のその熱い眼差しに、年の頃三十半ばの男はふわりと笑み。

男の野性味を感じさせる渋いカウボーイハットに手を添え、さらに深くかぶり直した。

それに乙女は耳まで赤くし、奥方たちは胸の前で手を組んで久々のときめきを噛み締める。

さらに蕩けるように甘くなった視線に、イヴォールフは内心どきまぎとしていた。

自らの格好は、それほどまでに凝視されなければならぬほど異様であるのだろうか。

しかし最近の下町では、こういったものが若向けに人気があるもののはずだ。

実際、この市に来てから数え切れぬほど似たような格好の若者とすれ違っている。

（やはり、若作りすぎたかの。趣味だからとてこれで尾行がばれたら、姫様に申し訳が立たぬわ）

どれ……と、彼は帽子の鍔つばの影から市に目を走らせた。

目に映ったいくつかの呉服屋のうち、最も高年齢向けそうな店に目星をつける。

的は少し先の店へ入り、簡易の椅子に腰掛けると店主と話し始めたばかりだ。

今ならば問題なかつと、翁老の騎士はするりと店に入った。

「すまぬ、ご主人。そちらの服を所望したい」

店内に入り、所狭しと並ぶ衣類をぐるりを見渡すと、早々にイヴォールフは品を定めた。

それは、黒に近い深緑の二列の銀ボタンが品のある詰襟のフロ

ツクコート。

夫に背を押され我に返り、慌てて指示された服を取ると店主の妻はそれをイヴオールフの前に広げて見せた。

「ああ、……本当に良い品だ。少し羽織らせていただいてもよろしいかな、細君殿」

こくこくとうなずくばかりの夫人に機嫌良く笑って、開いていたシャツの釦を全て止め襟を正すと、彼は流れるように裾を翻し手にしたものを身に纏う。

それはまさに彼のために作られたようで、逞しい体の線にぴったりと添い、その美しいシルエットをこれでもかと見せ付けた。

「ふむ。これならば、少々暴れても問題なさそうじゃな。……このままいただきたいのだが、おいくらだろうか」

ぐるりと肩を回し、しっかりと動くことを確認すると、彼は言い値を払うつもりで言った。

「おつ、御代なんかいりませんっ！」

若い男では到底出せない、時を重ねた色気を醸し出すその男っぷりに、店の女主人は拳を握って言い放った。

まるで夢のように似合うこの男が着てくれるなら、一針一針縫った甲斐さえ通り過ぎてしまう。

しかしその申し出に、イヴオールフは困ったように眉を寄せた。

「細君殿。お気持ちはこの上なく嬉しいですが、このような素晴らしい品に見合う値さえ払わぬようでは、わしはこの服に相応しくなくなってしまうぞ」

もの悲しそうに。まさにその表現がぴったりだった。

威厳と穏やかさを併せ持つ男の、弱弱しい途方にくれた様な眼差しを受け。

店の女主人である彼女は、片手で口元というよりも鼻の辺りを覆い、もはや頷くしかなかった。

話せば、手の中が血にまみれてしまいそうだったから。

店の主人に言われた値に色を付けた金額を置いて、イヴォールフは意気揚々と店を出た。見目も壮年を過ぎ落ち着いた頃に見えるだろう。

体を包む新しい感覚に、年齢不詳男はご機嫌だった。

「ほほ、やはり良い服を着ると気分も変わるものじゃ。たしか若者の間ではその高鳴りを、？こすぶれいやー？というのじゃったかの？」

浮き立つような足取りで通りを下る彼は、女性からの視線の熱さと数が一気に跳ね上がったことに気づきもしない。

あつという間に黄色い悲鳴を上げる女性方に囲まれ尾行に気づかれたイヴォールフは、皮袋に入れたままの長剣で逃げる対象を叩き伏せ、冷や汗を拭いながらまたも服装を間違えたのだろうかと首を傾げつつ。

尾行任務失敗から15分後、不思議そうな色音の鐘が春空に五つ染み込んでいった。

14・個別作戦 老騎士は、年齢不詳。（後書き）

男盛りの全てを田舎の庵で一人過ごした彼には、乙女の恋する視線と不審者への凝視の区別能力も己の色男っぷりへの自覚も、誠に遺憾ながら皆無。

15・個別作戦 新騎士は、怖い。

「ねえねえお兄さん。何やってるの？」

王城から最も離れた南東の城壁にへばり付くようにして広がる貧困窟にほど近い、平民下町。
その薄汚れた裏路地の陰鬱さとは反する明るさで、少年は声をかけた。

複雑に入り組んだ屋根のため、真っ昼間であるにも関わらずほの暗い中、手にしていたものを舐めるように見つめていた男は、悲鳴を上げて飛び上がった。

「ひっ！……っんだ、ガキかよ！」

慌てて振り返る。そこにただ少年一人を見とめ、男は安堵に息をついたのを隠すように大きく罵った。

しかし怒鳴られた少年は楽しそうにくすくすと笑って、好奇心を映した新緑色の瞳で近づき、身なりの悪い男が手にしているものを覗き込む。

「うんっ。だから、それが何だか教えてよ」

するりと近寄られた男は、指摘されたものを反射的に腕ごと体の後ろへ隠した。

これは、誰にも知られてはいけない、己が人生を左右するもの。
しかし、男は考える。

このただの子供一人に？コレ？を見せたところで、それが何かなんてわかりやしない。

しばしの躊躇と沈黙の後。今このお宝を自分が持つことがどれほどすごいことなのかを誰かに話したくて仕方がなかった男は、背中

へと下げた腕を少年へずいと突き出した。

「ふん、小僧。しょうがねえから見せてやる。これはな、すげえもんなんだぜ。でかいことやらかすために俺にこれを届けるつつたのは、親分直々でな！　これでおいらの出世も思つま……」

「ソウラ乾木かんぼくの幻覚薬。それも、質は最低」

鼻の穴を膨らませ、得意げに己の未来の展望について語っていたその手には、すでに擦り切れた薬紙に包まれたものはなく。

啞然とする男の目の前で、裂いた紙から小さく零れた粉をぺろりと舐めた少年が、低い声で呟いた。

「なっ、……なっ！」

あまりの出来事に男は、言葉も出ない。

しかし意味を成さない語を呻く男は歯牙にもかけず、マルティスは溶けずに口に残った不純物を唾と共に地に吐き出した。

それを苛立しげに踏みにじりながら、不愉快だなあと彼は嘲笑う。「シユナネのクソジジイが。俺がシメてる場所にこんな薬で島張ろうなんて、……耄碌もろくも過ぎると笑えないな」

王都から北東に離れた砂漠に隣接する街、シユナネ。その街を牛耳っているのは国の裏社会にその名を轟かせる五十過ぎの中年男。それが今回の黒幕だ。

しかし数年前、最大の取引相手であつた砂漠の民に手を切られ、必死に隠そうとはしていたが組織はかなり弱体化していたはずだ。だから、王都の貧困窟に己の管轄の薬をばら撒き、中毒者を量産し利益をすすると同時に、王都という地で復活を図ろうなどという馬鹿を起こしたのだろう。

にしても。焦っていたとはいえこんな男を出してくるようじゃ、もう奴の行く末も決まっている。

短く溜息をついて、ぽんつとマルティスは包みを後ろへ投げた。

「なっ、あああ!!!」

王都への旅の途中、己の命と同じほど大切にしてきた薬を追って、無我夢中で男は飛び出した。

「どわっ!」

全力で出した二歩目が何かに引っかかり、盛大に地面に転がる。

何が起ったのかわからないまま痛みに呻き、顔を上げ振り返ると。

「あんたも、三下とはいえこっちの世界の人間なんだ。この後どうなるか、……わかるよね?」

出した足を気だるげに戻しながら、少年が口端を吊り上げ見下ろしていた。

瞬間、それは反射だった。頭は、少年とは思えない程の威圧感を放つ者への恐怖に埋め尽くされていたが、体は無意識に動いて己が身を守るうとしていた。

だが、先程よりも速く出た二歩目は虚しく宙を搔く。シユナネの男は、路地をずらりと囲む突如現れた大男の一人に胸倉を掴まれていた。

「ボス、どうしますか」

犬でも持つかのように釣り上げた男を揺らして、大男は指示を仰ぐ。

この王都の裏社会を統べる、己が主に。

「いつもの所へ」

もうここに用はないと、マルティスは歩き様に告げ。

ああ、でもこれ以上虫がわからないようにしないと。

「王都に薬撒こうなんて下衆、姫さまの国から退場だ。よろしく」

ボスが言い置いた言葉は、絶対。今からでも、実行されるだろう。

ま、シュナネの悪魔と呼ばれたあのジジイには、甘すぎるかな。
年だけど、息したまま、国境越えられるといいね？

つまらなすぎた仕事は終わり、一番乗りで帰るため任務終了の鐘
が置かれた場所へと、マルティスはさくさく歩く。

しかしふと路地を出る直前、部下へ指示する時さえ振り返らな
かった彼は思い出したように歩を止めて。

「あ、みんな。このこと、姫さまには内緒にしてねっ！」

二分後、爽やかな風のように軽快な鐘が六つ、裸で吊るされた
男の耳にも届いていた。

15・個別作戦 新騎士は、怖い。(後書き)

なんかこのコだけ、変なタイトルになった……。

怖い。

後が、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7674q/>

夢を見たのは、青い楽園で

2011年2月19日13時28分発行